

Shinran
S50th
S800th

京都教区

2023年1月1日発行

慶讃だより

2023年
冬号



南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう

へ慶讃テーマへ



● 慶讃テーマから問われてくること

● 慶讃事業推進委員会委員長

● 8地区より

● 各地区のお待ち受け始まる

● 地区または組お待ち受け大会特集

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要（きょうさんほうよう）

第1期法要/2023年3月25日(土)～4月8日(土) 讀仰期間/2023年4月9日(日)～4月14日(金) 第2期法要/2023年4月15日(土)～4月29日(土)



南無阿弥陀仏

人と生まれたことの
意味をたずねていこう

虚談
佐藤委員会
委員長

深尾 浄信

ふかお・じょうしん
近江第七組 淨敬寺

母はお寺が好きだった。医者の長女に生まれ、ご縁あって父と結婚し、淨敬寺に来ることになった。保育士資格を活かし農繁期に本堂で子どもを預かり、三十年間余も季節託児所を開いた。保育士資格を活かし農繁期に本堂で子どもを預かり、三十年間余も季節託児所を開いた母であった。その母も一〇三歳で往生の素懐を遂げお浄土へと帰られた。母の通夜式で坊守さんには『勿体ない事したらあかん。お陰さんやでな』と、よく諭されたものだ」と八〇歳を超えたご門徒方が当時を振り返りながら懐かしそうに会話されていた。その光景に邂逅して、「いのち」の営みの尊さを改めて母に教わっているような気分になつたことを思い出す。

◆食品ロスの現状

恵方巻グームなどによる「食品ロス」がクローズアップされて久しい。まだ食べられる食べ物を捨ててしまうのは、勿体ないのは無論、地球環境にも悪影響がある。今、これから未来に向けて、食品ロスを減らすためのさまざまな取り組みが行われている。国際連合食糧農業機関の報告書によると、世界では食料生産量の三分

の一に当たる約十三億トンの食料が毎年廃棄されている。日本でも一年間に約六二二万トン（二〇一七年度推計値）もの食料が捨てられており、国民一人当たり、お茶碗一杯分の食べ物が、毎日捨てられている計算になるといわれている。一日三回、年間約一千回。今まで、しっかりと食と向かい合ってきたかが問われている。

◆たべものには仏がござる

宇野正一師の詩に戦慄を覚えたことを思い出す。

『たべものさま』

たべものさまに 仏がござる

おがんでたべなされ

大むぎめし しいなもち

まずいますいと もんくたらたら

そのたびに しかられた

帰命無量寿如来

おじいさん いま頃やつと

おがめました

たべものさまには 仏さまがござりました

『祖父の遺産』という講演録の中で宇野師は「食べ物さまには仏がござる」というのは、食べ物

が仮であるというだけでなく、食べ物の中にあるお働きが仮であると考えてまいりますと、そこ

に俄に、ひらけるものがあるのでは（中略）働く

きそのものが法身であつたことになる」。「はじ

めに念佛あり」に繋がり、自分が解ったのではなくて、照らし出されて我の姿がわかつてくる

のではないかということに到達いたします」と述べられている。

◆いのち

志村ぶくみ氏（染色家・人間国宝）はエッセイの中で「糸に変身する色は、死と再生があつてこそ生きる。ただ採ってきて染めたではないんです。本当に大切なちを頂いているという意識がなければ、草木染めはやってはいけないことなんです」と書いておられる。まさに『涅槃経』に「命を説きて食とす」（『真宗聖典』三〇八頁）とあるように、因中説果、志村氏は、果てある糸の色から、「いのち」をいただいているという意識の喚起を促しているのではないかと思う。

◆めぐみをいただく

他の「いのち」の営みを中断させ頂くそのことを、私たちは「食前／食後のことば」で表現する。

〔食前のことば〕

み光のもと われ今さいわいに

この淨き食をうく いただきます。

〔食後のことば〕

われ今 この淨き食を終りて

心ゆたかに力身に満つ ごちそまさま

「われ今さいわい」は深く願われてある自己に

気づき、「淨き食」とは食物が「いのち」その

ものであり、代え難い尊い、その「いのち」が

私を生かしていることを深くいただくことである

のだと思う。欠かせない食事は「いのち」と向

きあう場であり、南無阿弥陀仏の働きのお陰に

氣づき、より確かに聞き直していく生活であるといただくのではないだろうか。

「役に立つ／迷惑をかける」
を超えて

山城

藤井 洋

ふじい・ひろし
山城第一組 閑唱寺

高齢のご門徒と話をしていると、「何の役にも立たないで、迷惑ばかりかけるようになるなら、早く死にたい」という言葉をよく聞く。「役に立つ者になれ」、「他人に迷惑をかけるな」という世間の価値観の中で生きている私たちには、その言葉は共感されやすい。それでいいのかという思いはあるのだが、中々言葉を返せないでいる私がいる。

この問題を考える時、いつも頭に浮かんでくる話がある。鷺田清一先生がある本の中で語つておられる、昔入院された時の経験談である。先生の病室の向かい側のベッドに、いつも意識の混濁したような状態の老人がいた。そこに、昼過ぎになると新人看護師がやってきて、何か処置をするかのよう力でカーテンを引き、椅子に座ると、寝ている老人のベッドに突っ伏して仮眠を取っていた。なんと横着な振舞いと思つて見ていたが、しばらくするとその老人の様子に変化が現われた。看護師が寝ている間、

病室の入口を見張り、誰かが通るとその看護師の背をポンと叩くようになつた。そうして、徐々にその老人の顔が滲刺としてきたというのである。

ひたすら世話を受ける生活を続けてきた老人は、おそらく、自分はもう人に世話をされるだけで、誰からも必要とされない存在と思つていた。それが新人ナースの振舞いを見て、「この子は見つかったら大変なことになるぞ」と心配するようになつた。他人を心配する気持ちが起きたことが、老人の生氣を引き出したのであろう。しかし、自分の迷惑行為が起こした成果に、このナースは気づいてさえいない――

この話に触れて、私は「役に立つ」とか「迷惑をかける」ということを分かつた氣でいたが、それらは私の思いを超えたところで、人と人との関係の中で起つて事柄であり、しかも、二つは対立するばかりでなく、「迷惑をかける」と「役に立つ」ということすら起つてうのだと知らされた。

とはい、これは一般化できるケースではない、「人に迷惑をかけること、それは大いに必要なことである」とは、とても人に向つて言えない、と思つてしまふ私がある。私自身、他と切り離された個のところで「役に立つ」とか

「迷惑をかける」ということを捉え、「役に立たぬものは生きている価値がない」「迷惑をかけるだけなら死んだほうがまし」という価値観にお囚われているのである。そのような価値観の延長線上で、「生の意味」を求めたとしても、極めて狭い袋小路に行きつくだけであろう。

今回の慶讃テーマに「南無阿弥陀仏」が掲げられていることの意義は、私の思いから問い合わせるのでなく、それを問い合わせる「南無阿弥陀仏」を拠りどころとしようということであろう。そして、「人と生まれたことの意味」という表現は、親鸞聖人の「人間」という言葉に付せられた左訓「ひととうまるるをいふ」を想起させる。それを重ね合わせれば、関係の中で人と生きゆくものとしての自己の意味を、自己を成り立たせていく大地を確かめるという方向でたずねていこうという呼びかけと、このテーマは聞こえてくる。

私たちが、「役に立つ／迷惑をかける」という価値観を超えて、最期まで安んじて生きていく道は、その方向にしか開けてこないと思われる。

地区または組
お待ち受け
大会特集

慶讚法要



丹波第一組

慶讚法要、そしてお待ち受け法要にどれだけの人たちが、関心とモチベーションを持っているのか。そのようなことを思うのは、やはり新型コロナウイルス感染症によって三年近く様々な活動が制約されたことによる。しかし、このような状況の中で、今年になり各地区、各組ではお待ち受け法要・大会が行われ、また予定されているが、どのような思いでスタッフの方々は計画、準備をされているのだろうか。

そういう問い合わせを持ちながら丹波第一組宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年、立教開宗八百年慶讚お待ち受け法要にお参りをした。

十月十六日（日）十三時から美山町内久保の光瑞寺様を会場とし、秋晴れの中、満堂となつた本堂で奏楽から始まつた。雅楽を演奏されるのは光瑞寺御門徒の楽人方々。報恩講などの出仕に「五常樂」、退出に「越天樂」が演奏される。やはり雅楽演奏が入ると法要の緊張感も高まり、厳かなものになる。その後、

桂隆雄組長から表白が読まれた。その中では、現在丹波第一組が抱える美山町の少子高齢化、過疎化という大きな課題がある中、この法事が開催されたという主旨が述べられた。寺院数さながら兼務をする四人の御住職と御門徒方がこの組を支えている。このような現状の中で、念仏を相続していくことを、このお待ち受け法要によって再確認していくとする思いが伝わってきた。勤行は正信偈同朋奉讚で、コロナ対策をしながら、住職、門徒一同となつて唱和された。

休憩後、同朋女性の会の皆様による合唱があつた。この会は坊守、門徒の女性の方々で平成六年に発足し、各種研修会などを活発に行つてゐる。この時は仏教讃歌として「三帰依（パーリ文）」「真宗宗歌」などが唱和され、女性の会の皆様だけではなく、参詣者からも多くの方々が聞こえてきた。

引き続き、前大垣教務所長の譽田和人氏から法話をいただいた。その中で「我々は関係の中で生きていることの表のはたらきだけを見て、おかげさまという影の部分を見ていないのではないか」「地獄は行くところではなく、自分が作つており、そのことに気づいていない。しかし私たちの先祖はそのことに気づき、次世代へ念佛することによりそのことを伝えてきたのではないか」「生き方を相続していくことが念佛であり、そのことを確かめる道場が寺

なのである」「仏教によって未熟者といふことではなく、不熟者であることを知らされる」という言葉が印象に残つた。閉会の挨拶で野谷治夫門徒会長が「譽田節が聴けてよかつた」という言葉が象徴するように、笑いあり、考え方せられる時間ありとあつていう間の九十分であった。

今回、法話や代表者の挨拶を通して、組が抱えるこれから課題をどのように問い合わせ行くのかという回答を感じられた。象徴的なことは、法要終了後、組長様をはじめ、スタッフの方々とお話をしている時に、「まずは自分たちがやれることをやっていく」という声である。やる理由を考えるより、まずはやってみるということは、念仏申すことにも通ずるのではないか。そういうことを私自身改めて考えさせられたお待ち受け法要であつた。

教化広報部会 平原晃宗





石東組

去年（二〇二二年）十月一日、石東組宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讚法要お待ち受け大会が、島根県浜田市明清寺にて開催された。組内でほぼ毎月開催されている「真宗門徒の集い」の参加者を中心に大会参加が募られ、当日は、住職・寺族を含め八〇名余りの方が来場された。

開会にあたり、全員でともに正信偈をお勤めした。財間眞隆組長の挨拶、大会趣旨説明の後、結柴依子氏（東北教区淨專寺副住職）のご法話があつた。結柴氏は、本山の慶讚テーマ委員を務められ、『慶讚だより』二〇二一年秋号に、慶讚テーマについて寄稿いただいている。今回あらためて、『自身が慶讚テーマから問い合わせられていることについてお話しされた。

『慶讚だより』にも書いてくださったように、氏は兄上を亡くされている。エネルギー余つて郷里から役者を目指して上京、劇団俳優となり、なんとかここで生きなおすと励まっていた矢先、お寺を継ぐものと思っていた兄上が命終され、目の前が真っ暗になった。自分には関係ないと思っていたお寺の跡継ぎはどうなるのか、その不安・苦悩の中にあって、私に先立つてすべての人々が、思うとおりにならない人生のなかで、生まれたことの意味をたずねつづけてきたことを

知ったというお言葉に、深い共感を覚えた。

また、「誕生」という言葉から、自身の生き方が問いかえされてくるとして、「人を人として見る。そこではじめて私も人となる」という宮城顕先生のお言葉を紹介された。戦争や

部落差別、津久井山ゆり園事件、教団のハラスメント問題等によってあらわになる、人を人として見ない時代・社会のあり方。そして、精神疾患を患つておられた兄上への自らの視線からあらわになった、人を人として見ようとしてこなかつた自身のあり方。それらを問題とする視座である「如來の眼」を、南無阿弥陀仏から賜りつづけることの大切さを訴えられた。

仏教が教えることは、「自分ほど不確かでやしいものはない」ということであり、自分中心の「自分軸」や他者との比較を超えた視座、「如來はどうぞ覗くなるか」という「如來の眼」をいただいていくことが、お念佛の教えに出遇うことであると押さえられた。

南無阿弥陀仏の法によつてひらかれた、差異がなくなるのではなく、差異が碍りとならない世界を忘れないため阿弥陀の名を呼ぶこと。南無阿弥陀仏と称え、そのいわれを聞き、自身の方を問題とする視座を賜りつづけることの大切さを、繰りかえし確かめてくださった。

結柴氏のご法話後、壽老長吉郎組門徒会長の挨拶があり、一同恩徳讚を唱和して閉会した。お話をから、自らを南無阿弥陀仏の教えに問

い尋ねつづけてこられた結柴氏の歩みが感じられた。ひるがえって、自分なりに聞法しているつもりでいたが、本当に我が身を教えに聞いているといえるのか、私自身のありさまが厳しく問いかげられた。

慶讚テーマを丁寧に確かめる場をご一緒できしたこと、そこで、自身の生き方を問われる機会をいただいたことを、大変ありがたく思った。

教化広報部会 比叡谷真



宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讚法要

第1期法要

讚仰期間

第2期法要

3月25日(土)～4月8日(土) 4月9日(日)～4月14日(金) 4月15日(土)～4月29日(土)

2021年5月1日発刊の春号より季刊誌として発行され、本紙を含め全8号の刊行を重ねてまいりました『慶讚だより』も、いよいよ最終号となりました。「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讚テーマから問われてくる私たちの課題や、深奥に脈打つ真の願いを掘り起こすものとして、様々な方にご執筆いただきてまいりました。また、各地区や組でのお待ち受け大会の様子を取材し、情報の発信だけでなく、法要より聞こえ

てくる教えと願いの言葉を一人でも多く、ともに聞き、慶讚法要への歩みを確かめるべく制作してまいりました。これまでの記事を集約し、一冊にまとめた小冊子を発行する計画もございます。楽しみにお待ちください。全8号のご感想を、委員会メンバーや京都教務所までいただけましたら、小冊子発刊の励みになります。ぜひお待ちしております。ご愛読いただきまして、ありがとうございました。

慶讚事業推進委員会 教化広報部会



各地区等のお待ち受け法要

いよいよ春に、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讚法要をお迎えするにあたり、京都教区内の地区または組で開催が決まっているお待ち受け法要の日時をお知らせします。

湖南地区 ●地区で開催 2023年 5月6日 (土) 場所：栗東芸術文化会館さきら

湖東地区 ●地区で開催を検討中 2023年 5月か 6月の予定

湖西地区 ●近江第25東組 2023年 6月18日 (日)

場所：願心寺（長浜市） 講師：秦 信映 氏

丹但地区 ●丹波第2組 慶讚法要後に検討

●丹波第3組 組内寺院 報恩講参り合い

雲因地区 ●因伯組 2023年 2月 23日 (木) 「お待ち受け聞法会」

場所：とりぎん文化会館 講師：一楽 真 氏

石見地区 ●石西組 2023年 6月 10日 (土) 場所：正萬寺 講師：瓜生 崇 氏

真宗大谷派 京都教区『慶讚だより』2022年 冬号

発行人 篠岡 詔法（真宗大谷派京都教務所長）

発行日 2023（令和5）年1月1日

発行所 真宗大谷派京都教務所 Tel: 075(351)5260

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Eメール kyoto@higashihonganji.or.jp

表紙絵「本当の願い」 伊藤はるか

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索



編集後記

南無阿弥陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう。慶讚テーマを目にするとたびに、正解を求めて考えている私いました。慶讚だよりを通してたくさんの方々の思いにふれ、ますます答えを出さねばと思う私います。答えは出なくとも南無阿弥陀仏からの問いかけを受け止めていきたいと思います。

(教化広報部会 長 紀子)